図書館通信 No.59

2022年6月

本部総合庁舎１階展示室で開催中の常設展「資料とともにたどる金光大神のご生涯」（一部）の様子

特集：展示リニューアル

新型コロナウイルス感染症と金光図書館

希少雑誌の活用にむけて

棟方志功、金光に残る足跡

希少雑誌の活用に向けて

本館は、戦前や戦中に出版された希少雑誌を多数所蔵しています。それらの中には、県内の図書館にも所蔵されていない、もしくは利用者に公開されていないものもあります。例えば本館が所蔵する希少雑誌に『赤い鳥』の創刊号があります。大正７年(1918)発行のこの雑誌は、児童文学者の鈴木三重吉が発行したもので、童話や童謡の専門誌の草分け的存在です。本館は、そのような希少雑誌を、資料保護の観点に留意しながら、できるだけ公開してゆく取り組みを進めています。

今日、利用者が目当ての図書を探す場合、図書館のウェブサイトにある蔵書検索システムを利用することが一般的です。本館でも上記のような希少雑誌の書誌情報を１点１点入力し、蔵書検索に反映されるよう作業しています。

また、新たな情報発信の取り組みとして、短文投稿サイトTwitterの利用も計画しています。希少雑誌の情報をTwitterで発信する際、その雑誌に関わるさまざまなキーワードに「#（ハッシュマーク）」を付けて投稿することで、それらのキーワードに興味を持つ人たちに、本館の投稿が検索される可能性が高まります。Twitterが本館と新たな利用者の出会いの場になることを願っています。

(次長 金光研治)

本館公式Twitterに投稿された希少誌の情報

棟方志功、金光に残る足跡

「何んなりとも包紙 その他の意装を描きます故 仰せつけくださる様に。」(原文ママ) と書かれた 1 枚の葉書 (昭和29年２月８日消印) がある。平成28年３月末までJR金光駅前で営業していた菓子店・天王堂菓廛 (てんのうどうかてん) の店主 (当時) 弓削禮造に棟方志功が宛てたものです。

棟方は、昭和 20～30 年代にかけて来光し、金光図書館初代館長の金光鑑太郎と交流を深めると、昭和29年には本館で「棟方志功倭絵及び木版画展」と「棟方志功を囲む座談会」を開催します。棟方はその際に天王堂菓廛のカステラを口にしたようで、土産として自宅にも持ち帰っています。冒頭の葉書では、その礼が丁重に述べられるとともに、包装紙用の原画制作を申し出ています。

棟方は天王堂菓廛のために２点の墨画を描き、それを元に２種の包装紙が製作されました。長く親しまれた包装紙も天王堂菓廛の閉業とともに目にする機会は失われましたが、今春図書館で開催した収蔵庫企画展「生気と躍動の墨－棟方志功」において、本館所蔵の棟方の墨作品とともに、弓削家より借用した原画と包装紙を御霊地金光と棟方との関わりを示す資料として展示しました。博物館資料を所蔵・展示する図書館として、今後も金光にまつわる様々な記憶を記録としても蓄積してゆきたいと考えています。

(嘱託 齋藤武郎)

展示された原画（上）と包装紙（下）

掲示板

○『現代の図書館』に本館記事が掲載

（公社）日本図書館協会が発行する季刊誌『現代の図書館』第59巻第４号（2021年12月24日発行）に本館の記事が掲載されました。「私設・私立の図書館」という特集誌面において、「「読みたい調べたいという願いをもってくる人の願いが果たせる」あり方を求めて－金光図書館の取り組みの紹介」と題して、岡田清華（次長）が本館創立以来78年の歩みと取り組みをまとめ発表しました。

●受講者募集のお知らせ

青い鳥点訳・音訳グループでは、誰もが読書を楽しめることを目指し、視覚障がい者の読書をサポートする「音訳ボランティア」(入門 7/26～27、上級 7/27～28) と「教内点訳者」(7/27～28) の養成講習会を開催します。

講習会の詳しい内容や申込方法等は、金光教報 4 月号または本館公式 HP をご確認いただくか、本館までお問い合わせください。申し込み締め切りは6/30です。

編集・発行：金光図書館　〒719-0111 岡山県浅口市金光町大谷 320　TEL. 0865-42-2054 FAX. 0865-42-3134
E-mail : konko-library@konkokyo.or.jp　詳しくは... 金光図書館 検索

［編集後記］図書館通信 No.59 をお届けします。平成22年以来の発行となります。4月からリニューアルした展覧会の内容や、所蔵する希少雑誌の活用を促すための情報発信など、本館の“新しい”取り組みとともに、コロナ時代のなかで業務にあたる職員の率直な声を紹介しました。掲載記事のご感想とともに、図書館通信へのご意見もお待ちしています。

金光図書館

常設展「資料とともにたどる金光大神のご生涯」展示の様子

常設展「令和３年度 物故布教功労者御遺影展」展示の様子

展示ケースに収められた《神拝式許状》（左）と《諸国御門人帳》（右）：特集展示より

収蔵庫企画展「生気と躍動の墨－棟方志功」展示の様子

特集：展示リニューアル

金光図書館と博物館資料

金光図書館が所蔵する「資料」は、「図書」だけではありません。本館の運営について必要事項をまとめた「金光図書館規程」では、所蔵する資料として「図書館資料」（図書、新聞、雑誌及び視聴覚資料）、「文書館資料」（文書、記録、写真及び一枚物等）、「博物館資料」（本教関係遺物並びに美術品、遺物及び出土品等）の３つが明記されています。総合庁舎１階の展示室で開催する展覧会は、「博物館資料」を中心に企画・展示を行っています。

三本柱の展示構成にリニューアル

近年、本館主催の展覧会は、年１回のペースで展示替えを行うものでした。本年度から、資料保護の観点や多様な所蔵資料を紹介する機会を増やすべく、展示室に「常設展」、「特集展示」、「収蔵庫企画展」の３つのコーナーを設け、その内の「特集展示」と「収蔵庫企画展」は、それぞれ年3～4回の展示替えを計画しています。

常設展「資料とともにたどる金光大神のご生涯」と「物故布教功労者御遺影展」

「常設展」は、展示室の核となる企画であり、通年で展示するものです。現在開催中の「資料とともにたどる金光大神のご生涯」は、教祖金光大神のご生涯を 1～6 期に分けた年譜パネルで紹介するとともに、本館が所蔵する絵画や文書資料の複製、画像パネル等の関連資料と解説文を随所に展示し、展示室を訪れるさまざまな興味や関心を持つ観覧者に、教祖の事蹟について理解を深めてもらうことを狙いとしています。

もうひとつの常設展「物故布教功労者御遺影展」は、本教の布教にご功労のあった物故教師および信奉者の御遺影を展示し、長年のお働きに御礼を申し上げるものです。本展も通年の展示で、毎年 12 月に執り行われる布教功労者報徳祭にあわせて、当該年度の布教功労者の御遺影に展示替えを行います。

特集展示「資料歳時記 －四～六月－」

「特集展示」は、本館所蔵資料のうち金光教に関わる資料について、様々な切り口からテーマを設定し、そのテーマに沿った資料を紹介するものです。展示リニューアル後最初の企画では「資料歳時記–四～六月–」と題し、教祖が元治元年（1864）４月９日（新暦５月 14 日）に神道家元の白川家に入門したことが記録されている《諸国御門人帳》や、入門の際に下付された《神拝式許状》および《神拝式副状》とともに、教祖が使用した農具《麦打ち台》（麦の収穫期は ６ 月）といった、会期中の 4～6 月にまつわる資料を展示しました。

収蔵庫企画展「生気と躍動の墨－棟方志功」

本館所蔵の博物館資料には、本教に関連のあるもののみならず、広く歴史的、文化的価値を有するものも含まれています。「収蔵庫企画展」では、本館が所蔵しつつ、なかなか紹介できなかった多種多様な美術品や工芸品、出土品等の展示を目的としています。

４月から６月にかけて開催した「生気と躍動の墨 –棟方志功」は、棟方の大胆で力強い筆遣いから生み出された躍動感溢れる墨作品を通して、観覧者を明るく元気な気持ちにという願いで企画したものです。本館の所蔵作品を中心に、金光町の所蔵家からも作品２点と資料類を借用し展示しました。今後も引き続き自由かつ柔軟なテーマ設定と作品選定の展示を展開してゆく予定です。

これからの博物館資料の活用について

この度の展示リニューアルは、展示室での見せ方に留まるものではありません。昨年度より本館は、これまで滞っていた博物館資料のデータ化と収蔵庫の整理に取り組んでいます。そして、今後も継続的に資料の収集や保存を実施してゆくため、現状に即した収集方針と保存環境のあり方を検討し、保存と活用という図書館の役割を果たしてゆきたいと考えています。（嘱託 齋藤武郎）

新型コロナウイルス感染症と金光図書館

2020 年から始まった新型コロナウィルス感染症の拡大は、今でも全国の図書館に影響を与え続けています。当館も例外ではなく、緊急事態宣言やまん延防止等重点措置が実施される度に、閉館や利用制限、定期イベントの中止といった対応を取らざるを得ませんでした。

閉館中も図書館の来たるべき再開に向けて、職員は閲覧室の書棚や書庫の整理を進めていましたが、普段利用者と接する機会が多い私は、誰もいない閲覧室を見る度にやるせない思いになっていました。「本を読みたい」、「図書館を利用したい」という利用者のお声をいただく中で、職員たちと何ができるだろうと模索を始めました。

閉館中でも本の貸出を希望する利用者には、インターネットや電話でも資料の予約ができることを案内しました。しかし、本や雑誌のタイトルなどを正確に伝えることができない場合もあります。電話での聞き取りやメールでの遣り取りでは、相手の求める情報をいつも以上に聞き逃さないよう、対面時とは異なる応対が必要でした。利用者に図書館の玄関まで来てもらい、予約した本を手渡した時に向けられた笑顔からは図書館の存在意義を十二分に感じることができ、やるせない気持ちは徐々に薄らいでいきました。

2020 年の夏休みは、講師と会場をオンラインで繋ぎ、最小限の参加者を募り、感染防止対策を施したうえで、「わくわく科学おもちゃづくり」と題した子ども向けイベントを開催しました。世間ではイベントが軒並み中止になる中で、多くの方のご理解とご協力で開催できたことをありがたく思いました。

初代館長の金光鑑太郎師は、開館 10 周年記念の座談会で、昭和 22 年の開館時を回想しながら「読みたい、調べたいという願いをもって来る人の願いが果たせるようお世話する、それが道の行き方である」と語っています。当時の職員たちが、開館のために一丸となり奮闘していた状況と重なり、私はこの言葉に励まされました。そして、資料があるだけではなく、利用者がいて、利用し続けてもらうことが、図書館の存在意義のひとつであると再確認しました。

今も感染拡大は止まらず、図書館活動にも制限があります。利用者が来館してくれること、図書館を利用してもらえることの喜びをかみしめながら、日々努めていきたいと思っています。（次長 岡田清華）